

「坂梨・御所浦やんちゃ教室」

～阿蘇活火山と御所浦恐竜島での冒険～

- 【主催】 国立阿蘇青少年交流の家
【後援】 熊本県教育委員会・阿蘇市教育委員会・天草市教育委員会
【協力】 阿蘇市立坂梨小学校・天草市立御所浦小学校
【期間】 平成22年7月5日(月)～7月10日(土) 5泊6日
【会場】 国立阿蘇青少年交流の家・天草市御所浦町黒島 他
【参加者】 阿蘇市立坂梨小学校5年生11名(男子8名, 女子3名)
天草市立御所浦小学校5年生21名(男子10名, 女子11名)
【講師】 国立阿蘇青少年交流の家研修指導員 古澤 順正 氏
国立阿蘇青少年交流の家研修指導員 市原 正 氏
国立阿蘇青少年交流の家研修指導員 藤井 法行 氏

【検討委員会委員】

千葉大学教育学部教授	明石 要一 氏
熊本県阿蘇教育事務所指導主事	栗原 邦広 氏
阿蘇市教育委員会教育部長	岩下 哲郎 氏
阿蘇市教育委員会審議員	石本 明史 氏
天草市教育委員会教育部教育指導課長	山本 輝彦 氏
阿蘇市立坂梨小学校校長	星山 晃 氏
阿蘇市立坂梨小学校5学年担任	杉 聖也 氏
天草市立御所浦小学校校長	小出 廣久 氏
天草市立御所浦小学校5学年担任	松村 宗尚 氏



出合いのつどいの様子

1 趣 旨

阿蘇のフィールドと御所浦の海辺を生かした自然体験活動や体験的な教科学習活動、生活体験活動等をとおして、自主性と助け合う心、そして何事にも粘り強くやり抜こうとする心を育てる。また、阿蘇の山の子どもたちと天草の海の子どもたちが交流活動をすることにより、多様な考えや価値観に触れさせ、故郷のよさとお互いの良さに気付かせながら社会性を育てる。

2 目 標

- (1) いろいろな人と対話でき、他の人と協力する態度を育てる。
- (2) 困難に耐え、粘り強くやり抜こうとする心を育てる。
- (3) 故郷のよさ、またお互いのよさに気付く心を育てる。

3 事業展開

(1) 研修プログラム

	6:00	7:00	8:00	9:00	10:00	11:00	12:00	13:00	14:00	15:00	16:00	17:00	18:00	19:00	20:00	21:00	
1日目			御所浦小移動（阿蘇青少年交流の家へ）				昼食	出会いのつどい	ようこそ阿蘇へ	野外炊飯				入浴洗濯	振り返り	就寝準備	就寝
	6:00	7:00	8:00	9:00	10:00	11:00	12:00	13:00	14:00	15:00	16:00	17:00	18:00	19:00	20:00	21:00	
2日目		起床・つどい	朝食	連絡・準備	登山活動（頂上にて昼食）				移動・休憩	テント設営 シュラフの使い方	つどい・入浴・夕食・洗濯		スタンツ練習	振り返り	就寝準備	就寝	
	6:00	7:00	8:00	9:00	10:00	11:00	12:00	13:00	14:00	15:00	16:00	17:00	18:00	19:00	20:00	21:00	
3日目		起床・つどい	朝食	テント撤去	メダカの捕獲・観察		昼食	メダカの観察	インタビュー名人になろう		つどい・入浴・夕食・洗濯		スタンツ練習	振り返り	就寝準備	就寝	
	6:00	7:00	8:00	9:00	10:00	11:00	12:00	13:00	14:00	15:00	16:00	17:00	18:00	19:00	20:00	21:00	
4日目		起床・つどい	朝食	退所点検	御所浦へ移動		昼食	ようこそ御所浦へ	恐竜島化石探検	移動・休憩	マグロ解体	夕食作り・食事・片付け	入浴洗濯	スタンツ練習	振り返り	就寝準備	就寝
	6:00	7:00	8:00	9:00	10:00	11:00	12:00	13:00	14:00	15:00	16:00	17:00	18:00	19:00	20:00	21:00	
5日目		起床準備	朝食作り・食事・片付け ※昼食作り	無人島へ移動	生活をするための準備 （テント設営・釜作り等）		昼食	漁業についての学習・ とんどこ漁体験・タイ養殖餌付け体験		野外炊飯			キャンプファイヤー		就寝準備	就寝	
	6:00	7:00	8:00	9:00	10:00	11:00	12:00	13:00	14:00	15:00	16:00	17:00	18:00	19:00	20:00	21:00	
6日目		起床準備	朝食	別れのつどい	坂梨小移動（阿蘇青少年交流の家へ）												

(2) 目標達成のための手立て

① 検討委員会の実施

回	開催期日	主 な 内 容
1	6月3日	小学校自然体験活動モデルプログラム開発の視点や内容
2	1月6日	モデルプログラムの成果と課題、普及

② 事業運営・サポート体制の確立

長期にわたる集団宿泊研修の課題として、活動時間だけでなく、児童の安全管理や生活指導など、引率職員の負担が大きくなることが予想される。そこで、担任だけでなく、他の教職員や交流の家職員、地域の指導者、ボランティアで指導支援する体制づくりに努めた。

③ 学校との連携

1週間の体験活動の実施となると、学校行事だけで教育課程を実施することは難しい。そこで、教科に体験的な活動を取り入れて効果的な指導を行うことで、時数を確保できるようにした。

【教科として実施した活動】

- ★国語『インタビュー名人になろう』
- ★社会『水産業のさかんなまち』
- ★家庭『ご飯とみそ汁』
- ★理科『生命のつながり』
- ★理科（化石発掘をしよう）
- ★体育（登山活動）
- ★学活（出会いのつどい）
- ★学活（スタンツ練習）
- ★学活（キャンプファイヤー・別れのつどい）



メダカの捕獲の様子



インタビュー名人になろう



阿蘇フォーラムでの児童発表

④ 家庭との連携

○事前説明会の開催

- ・自然体験活動の意義や効果
- ・指導支援体制（安全管理など）、他

○阿蘇フォーラム（主催：阿蘇市PTA連合会・阿蘇郡市教育委員会連絡協議会・熊本県阿蘇教育事務所）での事例報告

- ・学校（担任による事例発表・児童による寸劇等による発表）
- ・保護者による感想
- ・阿蘇青少年交流の家職員による報告

具体的な体験活動

★いろいろな人と対話でき、他の人と協力する態度を育てる活動



練習の成果を発表中！



力を合わせてテント設営！

★困難に耐え、粘り強くやり抜こうとする心を育てる活動



頑張り抜いた登山活動



頂上でハイ・ポーズ！

★故郷のよさ、またお互いのよさに気付く心を育てる活動



阿蘇の水は最高です！



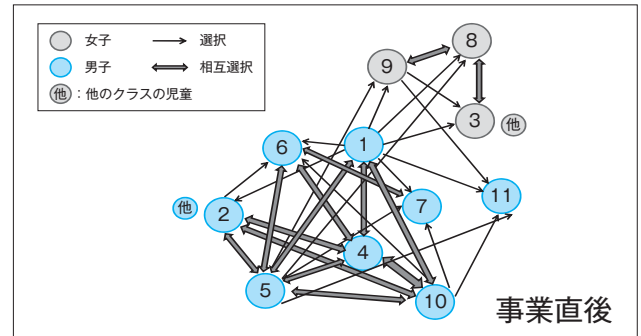
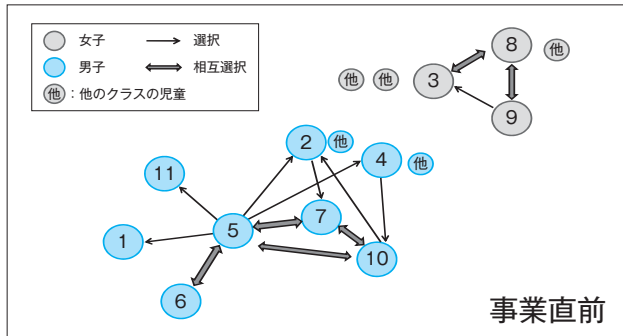
とんとこ漁で大漁だ！

4 結果

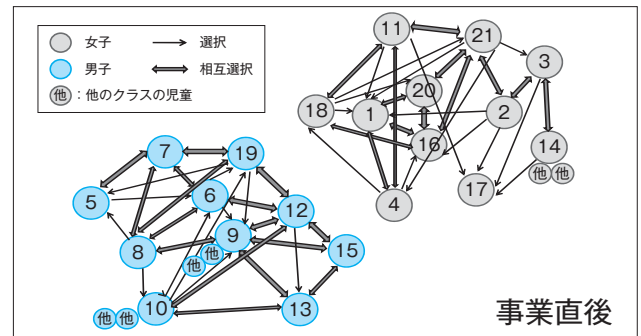
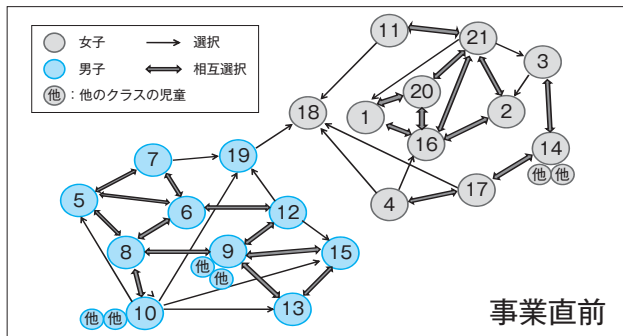
児童の変容については、IKR（生きる力）アンケートと千葉大学教育学部明石研究室作成のアンケート、ソシオメトリック・テストをもとに調べた。

(1) いろいろな人と対話でき、他の人と協力する態度を育てる活動

【坂梨小5年生】

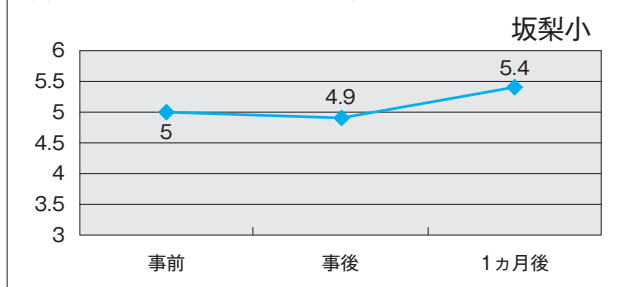


【御所浦小5年生】

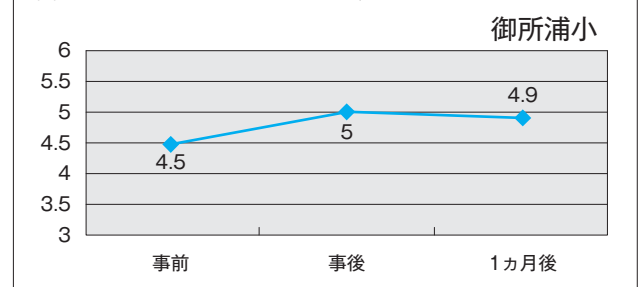


(2) 困難に耐え、粘り強くやり抜こうとする心を育てる活動

(1) どんなことにもあきらめずにがんばる

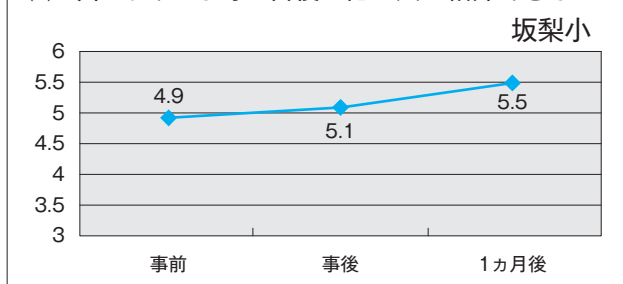


(1) どんなことにもあきらめずにがんばる

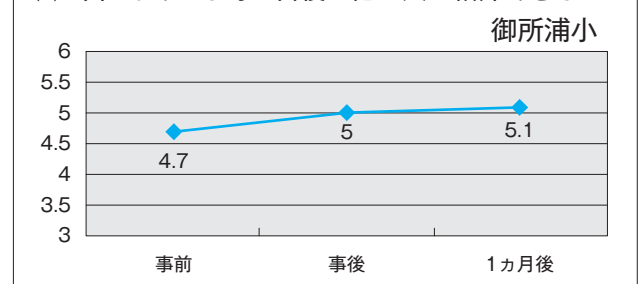


(3) 故郷のよさ、またお互いのよさに気付く心を育てる活動

(2) 今住んでいる町の自慢を他の人に紹介できる



(2) 今住んでいる町の自慢を他の人に紹介できる



5 成果と課題

(1) 成 果

- ① 野外炊飯やグループでの学習、キャンプファイヤーに向けてのスタンプ練習など友だちと協力して行う活動をとおして、人間関係の広がり・深まりが見られた。特に、坂梨小においては事業直後に男女間のつながり・関わりが多く見られ、御所浦小においては友だち同士の相互の深まりが強く見られた。いろいろな活動の中で、人間関係を築くことができたようである。

(ソシオメトリック・テスト)

- ② 登山活動や無人島宿泊体験活動をとおし、達成感や満足感、また悔しさを味わうことにより、困難に耐え、最後まで頑張り抜こうとする心が育つきっかけづくりができたと考える。(グラフ1)

※エピソード：登山中に、喘息の症状が出てきた児童Aがおり、スタッフ数名と途中下山することとなった。児童Aは「みんなと頂上まで行きたい。」と言ったが、児童Aの健康を第1に考え下山を判断し、児童Aは涙を出しながらの下山となった。しかし、その児童Aの気持ちを大切にしたいと考え、一緒に下山していたスタッフが交流の家まで共に歩いた。そして、更に、ゴールで「みんなを迎えよう。」ということから、交流の家からその地点までスタッフと歩くこととなった。ゴール地点には本体と児童Aたちはほぼ同じ時間に着き、それぞれの達成感・満足感を味わうことができた。(児童Aは総距離8km程歩いたことになる。)

- ③ 地域の川でのメダカの捕獲や大草原での活動、伝統漁「とんとこ漁」や海浜活動等、大自然の中で地域の特色をいかした活動をとおして、自分の町について知り、人に紹介できるようになっている。故郷のよさに気づくきっかけづくりができたと考える。(グラフ2)

(2) 課 題

- ① 児童や引率者等の安全面を更に考慮した運営体制にするため、「経験豊富な指導者の確保」、「平日のボランティアスタッフの確保」に努める必要がある。
- ② 学校と更に綿密な連携を取りながら、教科として実施できる効果的な体験活動プログラムの開発、そして多くの学校が実施できるプログラムの開発に努める必要がある。

